



- 体育会名: 関西学院大学体育会剣道部
- 創部年: 1912年(明治45年)
- 2025年度会員数: 78人(4年16人、3年15人、2年26人、1年21人)

- 同窓倶楽部名: 関西学院大学体育会剣道部同窓倶楽部
* 関西学院同窓会 公認団体

- 同窓倶楽部通称: 雄華会
- 設立年: 1930年(昭和5年)
- 会員数:

[1929(昭和4)年～41(昭和16)年]

《戦前の第2期黄金時代を築く》

1929年の上ヶ原移転後、剣道部専用の道場が設けられた。同年からの岡山医大主催全国高専大会3連覇を始め、京大主催高専大会優勝、愛知医大主催中部高専大会団体・個人優勝、更には40年7月に開催された第13回全日本大学高等専門学校大会において決勝戦で早大を下し優勝する等、昭和初期の黄金時代を築いた。

30年には正式に剣道部OB会が組織化され、長江徹雄が「男の華」という意味で「雄華会」と命名。33年、松本敏夫が南海電鉄を辞し関学大予科に奉職、学生の指導に当たった。

[45年～54年]

《戦後の「関学剣道部」の復活》

戦後、剣道は占領軍の指令により禁止となったが、各方面で復活に向けその機運が高められ50年、「剣道」という名称を避け「全日本撓(しな)い競技連盟」が設立された。52年7月に文部省は剣道を公認、10月に「全日本剣道連盟」が結成された。

関学剣道部は52年、福田泰弘が中心となり、経済学部大前朔郎先生に剣道部長就任をお願いし、「撓競技同好会」として運動総部に届け出、6月28日に承認された。翌53年には待望の「剣道」が復活したのに伴い「剣道部」となった。なお、53年の全日本撓競技選手権大会では雄華会島田喜一郎が優勝している。

復活後、師範には早坂広道先生が再任され、初代主将の田村照國は関西学生剣道連盟並びに全日本学生剣道連盟の結成にも尽力、後年その功績等が認められ全日本剣道連盟

から「剣道有効賞」を受賞した。

53年の第1回全関西学生(以下「全関」)及び全日本学生(以下「全日」)に出場したが、成績は残せなかった。翌54年、第2回全関個人戦で田村が撓競技の部で優勝、剣道の部で3位となった。この年から関大との定期戦が始まったほか、慶大との定期戦はその前年から始まっていた。

[55年～65年]

《復活早々 常勝関学の時代を築く》

55年全関、全日各団体戦において、それぞれ初優勝を飾った。全関団体戦は57年までの3連覇のスタートの年となった。全日本学生連盟は57年、米国への学生剣道使節団を編成派遣、選手13人の中に井上弘一が選出され、親善試合個人戦で準優勝した。同年、前年に他界された早坂先生の後任師範として井坂賢一郎先生を迎えた。

59年以降は有望な部員が多数入部、60年の第8回全関個人戦で柴田英一郎が優勝、新人の部で豊田芳一が準優勝、同年の第8回全関団体戦でも優勝している。

61年10月、待望の新道場が完成した。その年の12月、雄華会石本広一会長が逝去、関学剣道部の歴史を語る時、忘れてはならない先輩で、関西学生連盟副会長、関学体育会OB 倶楽部会長等を歴任された。

62年、主将の任に就いた柴田は井上茂明、小倉正幸の強靱な両副主将を得、奮迅の活躍をした。全関個人戦で2度目の優勝を果たし、その勢いを以って全日個人戦に臨み見事優勝を成し遂げた。これは戦前の松本敏夫に次ぐ快挙であった。団体戦では5月の西日本学生大会優勝をはじめ、全関団体戦も優勝し全関3連覇を果たした。

63年全関個人戦は関学勢ばかりが目立ち、ベスト4の内関学勢が3人(豊田、馬場信介、土谷弘明)を占めた。決勝で豊田が勝利し前年の柴田に続き全関個人戦連覇。続く6月の全日個人戦では豊田、土谷共に準決勝に勝ち上がり、豊田を破った土谷が決勝で法政大の松本選手に勝利し、前年の柴田に続き全日個人戦を連覇した。

64年、土谷主将の下、副主将の大芝利文、丸山暁、3年に皆川佳則、米田信嗣、2年に

相沢孝紀、郡康之、1年に大芝信雄、安井博記など個性的実力派が揃い活況を呈した。翌65年には神谷明文、米田義一など強烈な新人が入部し、選手層が充実した関学は全関団体戦では止まるところを知らず、60年から65年まで6連覇の偉業を成し遂げた。

[66年～74年]

《学生剣道界の雄「関学」》

66年はライバル関大に勝ちを譲ったが、翌67年は安井が全関個人戦で優勝、続く全日個人戦で3位の成績を残した。この年は関学の勢いが蘇り、全関団体戦も決勝で同志社を破り優勝した。

翌68年の主将神谷明文は、副主将の米田義一と切磋琢磨し、伝統ある剣道部を統率牽引、学生剣道界に関学ここにありと改めて名を知らしめた。同年の全関個人戦は関学同士の決勝となり、神谷が米田を倒し優勝。続く6月の全日個人戦においても準決勝まで神谷、米田共に勝ち上がり、神谷が決勝で国士館の藤原選手を破り、関学に5年ぶりの優勝をもたらした。

70年、関学監督に井上茂明が就任。安井博記に引き継ぐまでの6年間、仕事の傍ら自ら修行に励むと共に学生の指導に当たった。同年春の全関個人戦は前々年に続き関学同士の決勝となり3年の山洪数則が2年生土井清孝を下し優勝した。

[75年～88年]

《来るべき時代に備える忍の時代》

81年、監督が安井博記から神谷明文に引き継がれ、当時の主将倉本知典は日頃のまじめな稽古を実らせ、全関個人戦で3位に入賞。しかし、この年の8月に57年以来師範としてご指導いただいた井坂賢一郎先生が逝去され、後任師範は兵庫県警察本部剣道師範の宮崎昭先生に82年からご指導いただいている。

また、同年は女子部員が4年内芝(旧姓古田)、坂本(旧姓豊田)を中心に総勢10人を数え、関学剣道部女子の歴史において初期の華やかな時代を築いた。

83年、雄華会会長に田村照國が就任。翌84年、学院では第2学生会館が竣工、館内3階に新剣道場(現剣道場)が完成した。

87年7月、生涯を通じ関学剣道部の育成に力を注いだ雄華会松本敏夫名誉会長が逝去。同氏は全日本学生連盟会長を始め、全日本連盟副会長等を歴任、更に75年に制定された全日本連盟「剣道理念」の作成委員長も務めた。

この頃は全日への出場権を得るのが精一杯の状況であったが、88年主将三浦秀史が全日本東西対抗試合で優秀選手賞を受賞、部員減少の中で気をはいた。

[89年～98年]

《部員不足を解消すべく学生自ら考え立ち上がった》

数年来部員不足に悩まされてきたが、89年は新入部員が15人と久し振りに活気が戻ってきた。9月の全関男子団体戦では3位と17年ぶりに入賞した。

91年3月、40年の永きに亘り剣道部長を務められ、学生の指導をはじめ剣道部の発展に尽力された大前朔郎先生が定年を迎えられ、後任部長に経済学部教授池田信先生が就任された。

92年4月、新神戸オリエンタルホテルにおいて創部80周年記念式典、祝賀会を開催。翌年1月の雄華会総会において田村照国会長の後任として奥谷勝彦が選出され就任した。また、同年から関学剣道部主催高校剣道大会が始まった。同大会は94年の卒業生が現役時、部員確保が困難な状況を鑑み、学生として何が出来るかを真剣に話し合い企画、雄華会が全面的に支援することでスタートした。大会を通じ参加した高校生に関学キャンパスの雰囲気や剣道部の活動をアピールしている。

当時の関学は団体戦で全日本への出場権を獲得したり逃したりした状況であったが、毎年軸となる選手が現れ、男子では中居昭博、木下一成、高木光、女子では宮部(旧姓百本)祥子、山形(旧姓神谷)文枝、林(旧姓西本)妃寿、光延(旧姓佐藤)和世らが部を牽引。95年全関女子団体戦で準優勝する等の足跡を残した。この間、監督は神谷明文から脇坂善哲、倉本知典へ順次引き継がれ学生の指導に当たった。

98年全関個人において、男子は2年生河合雄司が、女子も2年の玉田(旧姓河崎)千佳子が夫々3位に入賞。この頃から女子は全日へコンスタントに出場する力をつけて来ていた。

[99年～2013年]

《ひしめく剣道場 嬉しい悲鳴！ 現役学生、雄華会会員共に活躍》

2002年、創部90周年を迎え、定年を迎えられた剣道部長池田先生への謝恩と併せ記念祝賀会を関学会館において開催。後任の剣道部長として商学部教授深山明先生が就任された。この年、男子監督に三浦秀史が、女子監督に登尾健哉が就任。

03年、第1回全国学連剣友(OB・OG)大会が慶大で開催され、「熟年の部」(3人制)で柴田、井上、安井のメンバーで優勝、「成年の部」(5人制)は神谷、米田、国川、三浦、高木のメンバーで3位と関学の存在感を示した。

この頃の特筆すべき内容として高等部剣道部のことが挙げられる。常に兵庫県下で上位の成績を納め全国大会へ出場する等力をつけており、大学剣道部にとって大きな原動力となった。中でも07年卒福井貴之、08年卒廣瀬賢治の健闘が光った。

一方、女子にとって05年は記念すべき年になった。全関個人で女子リーダー鳥井優子が優勝、3年生植田早紀が3位と輝かしい成績を納めた。全関個人制覇は男女併せ実に35年ぶりであった。一方、同年6月に戦後の剣道部復興に尽力され、40年の長きに亘り剣道部長を務められた大前朔郎先生が逝去され7月24日、関学会館でお別れの会が行われ雄華会会員が全国から参集した。

翌06年の全関団体戦では、男子が目標にあと一步届かず準優勝に終わったが、女子が念願の初優勝を果たし、続く全日本団体戦でもベスト8に進出、ようやく全国トップレベルの間入りを果たした。

06年には雄華会先輩も活躍した。長年学生指導に携わっている総監督神谷明文(教士八段)が、「のじぎく兵庫国体」で兵庫県チームの監督・大将として出場、兵庫県に43年ぶりの優勝をもたらした。剣道部・雄華会にとって申し分のない戦績を納め実のある年であった。

98年以降、推薦入試が漸次拡大されるにつれ部員数も増加。毎年男女合わせ20人前後の有望な新人が入部するようになり、かつての常勝関学に思いをはせる雄華会会員から現役に大きな期待が寄せられる状況となった。

10年春、兵庫県警察本部剣道師範永松真澄先生を新たに師範としてお迎えし、宮崎、永松両師範から指導を頂くこととなった。

この頃の主な戦績は、07年全関新人大会で男子団体戦優勝。男子個人戦では08年に八田篤が全日3位、12年に中津琢磨が全関で準優勝した。女子個人戦では08年松本(旧姓高木)愉香子、12年矢ヶ崎友香が夫々全関3位、全日女子東西対抗においても両者とも優秀選手賞を受賞した。12年の男子団体戦は全関では3位だったが、全日でベスト8に進出した。

12年、創部100周年の記念すべき年を迎え6月23日、関学会館において来賓、大学関係者、現役、雄華会会員約400人が出席して記念式典、祝賀会を開催。新たな100年に向け大いに盛り上がった。

雄華会会員の中には卒業後も仕事と剣道に精励し、生涯剣道を目指し元気に活躍している先輩が多数いる。08年、豊田芳一は全日本高齢者武道大会で個人優勝。井上茂明(範士八段)は09年、ブラジルで開催された世界剣道大会日本選手団の強化委員長、総監督として参加、総合優勝に導いた。また、合格率1%の剣道最高段位八段の難関審査に挑戦し、合格した者が現在4人(前記2人の他、丸山暁、大芝信雄)を数え、学生剣道の域を超え我が国剣道界での指導的役割を担い活躍している。

13年1月の雄華会総会において、奥谷会長の後任として神谷明文(前総監督並びに前関学体育会監督会会長)が選任され就任した。奥谷は20年の永きに亘り雄華会会長を務め、剣道部並びに同会の発展充実はもとより体育会同窓倶楽部の発展にも寄与した。

同年3月、創部100周年記念事業のひとつとして、足掛け4年の歳月を費やし編纂に取り組んだ「関西学院大学剣道部百年誌」が刊行された。

この年から女子監督が登尾健哉から西川敬人に引き継がれた。部員は男女合わせ100人近い大所帯となり、道場の狭隘さに一段と拍車をかけることとなった。主将山内は、リーダーシップを発揮し部全体をよくまとめ春の全関個人に臨み、男子は山内他3人が、女子は3位に入賞した4年生内田のほか1人が全日出場権を獲得。7月の全日では上位進出を果たせな

かったが、東西対抗で山内は東軍の強豪選手を連破し優秀選手賞を受賞した。

この年の夏は酷暑が続き、防具を着けての稽古は非常に辛いものがあったが、部員一丸となって稽古に励み、厳しい夏合宿も乗り越えた。更に男女夫々で強化練習を企画、兵庫県警をはじめとした近県警察への出稽古及び関東強豪大学への遠征等、例年になく稽古を積んで万全の態勢で秋の全関団体戦に臨んだ。結果、男子は実に46年ぶりの優勝。女子も7年ぶり優勝と、男女揃って全関制覇を成し遂げた。創部101年目の新しい歴史の幕開けに相応しい、輝かしい結果を残すことが出来た。

(資料) 平成 25 年 「関西学院大学剣道部百年誌」

